

News Letter

日本精神障害者リハビリテーション学会



ともに創る、ともに暮らす

2026 年 9 月 発行

VOL. 68



- 01 第 33 回京都大会のご案内
研修セミナーのご案内
大会企画者にインタビュー！
- 02 ニュースレター表紙の作者の言葉
- 03 論文執筆におけるパラグラフ・ライティングと資料公開
- 04 令和 9 年理事改選に向けて
- 05 編集後記

【事務局】〒060-8556 北海道札幌市中央区南 1 条西 17 丁目
札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学第二講座 池田研究室
<https://japr.jp> Mail : japr.jimukyoku@gmail.com

01 / 日本精神障害者リハビリテーション学会 京都大会のご案内

大会長 千葉 理恵

(京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻 精神保健看護学分野)

第33回京都大会の開催が近づいてまいりました。多くの皆様に演題登録をいただき、どうもありがとうございました。事前参加登録は11月30日(月)までとなります。京都大会企画委員会・事務局一同、首を長くして皆様のお越しをお待ちしております。

>> 大会概要・主なプログラム

- ・大会テーマ：語りあい、つながりあい、ともに生きる —リカバリーの新しい風を京都から—
- ・会期：2026年12月19日(土)・20日(日)
- ・会場：京都大学
- ・大会運営組織

大会長：千葉理恵(京都大学大学院 医学研究科 精神保健看護学分野 教授)

副大会長：村井俊哉(京都大学大学院 医学研究科 精神医学分野 教授)

プログラム委員長：稲富宏之

(京都大学大学院 医学研究科 脳機能リハビリテーション学分野 教授)

顧問：山下俊幸(京都府立洛南病院 名誉院長)

大会長企画 12月19日(土) 10:40-12:10

メンタルヘルスの社会的要因に立ち向かう：精神保健医療福祉における多様性・公平性・包括性の視点から

座長：千葉 理恵(京都大学)

座長：Edilma Yearwood(Georgetown University)

パネリスト：船越 明子(神戸市看護大学)

前田 直(長谷川病院/みんなねっと)

指定発言：桐原尚之(京都ユーザーネットワーク/全国「精神病」者集団)

教育講演1 12月19日(土) 13:40-14:40

精神科臨床で「専門性」と「民主性」を両立させるにはどうすればよいのか?触

演者：村井俊哉(京都大学)

座長：内野俊郎(久留米大学)

教育講演2 12月19日(土) 16:40-17:40

リカバリー志向ケアの質をどう測るか：目標志向型ケア指標の開発

演者：Joshua Breslau(RAND Corporation)

座長：宮本有紀(東京大学)



教育講演 3 12月20日(日) 9:15-10:15

犯罪被害者への理解と心理社会的支援 —京都犯罪被害者支援センターの取り組みから—

演者: 山下俊幸 (洛南病院)

座長: 浜垣誠司 (高木神経科医院)

大会シンポジウム 1 12月20日(日) 10:30-12:00

地域生活支援の課題とこれからの挑戦 ～「地域で暮らす」、「地域で参加する」に向けた多層的な支援の再構築

座長: 稲富宏之 (京都大学)

座長: 久永文恵 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所)

シンポジスト: 高木俊介 (たかぎクリニック)

シンポジスト: 金井浩一 (相談支援事業所しっぽあーれ)

シンポジスト: 金山達也 (ワンモア豊中)

大会シンポジウム 2 12月20日(日) 13:20-14:50

災害リスクと共に生きる:精神障害のある人と支援者の経験から考える、健康危機時のメンタルヘルス・心理社会的支援

座長: 山下俊幸 (洛南病院)

座長: 千葉理恵 (京都大学)

シンポジスト: 茅野龍馬 (WHO)

シンポジスト: 須藤康宏 (メンタルクリニックなごみ)

シンポジスト: 田中浩二 (金沢大学)

シンポジスト: 石尾大輔 (いまここ親の会)

学界シンポジウム 12月19日(土) 14:55-16:25

「2036年、制度はリカバリーを支えられているのか?」 -10年後のリハビリテーションとリカバリーを展望する-

司会: 小野彩香 (Switch)

座長: 樽谷精一郎 (新阿武山病院)

シンポジスト: 大石甲 (障害者職業総合センター)

シンポジスト: 彼谷哲志 (あすなろ/三田市障害者総合相談窓口 きいてネット)

シンポジスト: 佐抜洋平 (あい相談支援センター)

シンポジスト: 吉田 光爾 (東洋大学)

シンポジスト: 吉見 明香 (横浜市立大学附属市民総合医療センター)

指定討論: 山口創生 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所)

心理教育・家族教室ネットワーク協賛シンポジウム 12月19日(土) 14:55~16:25

協働と権利のコンフリクトについて考える:今の精神医療のシステムが、当事者・家族・支援者間にもたらすもの ~心理教育を通して~

キーノートスピーチ: 伊藤順一郎 (メンタルヘルス診療所しっぽあーれ)

キーノートスピーチ: 後藤雅博 (こころのクリニック ウィズ)

座長: 佐藤純 (Cafs きょうと)

座長: 福井里江 (東京学芸大学)

リフレクション: 佐藤純 (Cafs きょうと) 他、当事者・家族



SST 普及協会協賛シンポジウム 12 月 20 日

(日) 10:30-12:00

**浦河べてるから学ぶ、当事者研究・リカバリーと
SST の役割**

座長: 向谷地悦子 (浦河べてるの家/訪問看護ステーションマール)

座長: 安西 信雄 (帝京平成大学大学院)

演者: 向谷地生良 (浦河べてるの家)、浦河べてるのメンバー

研修セミナー1 (研修委員会企画) 12 月 19 日

(土) 14:55-16:25

**PPI (当事者・市民参画) 時代の研究倫理入門 —
精神障害リハビリテーション領域の研究**

講師: 森拓也 (京都大学)

座長: 松長麻美 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所)

研修セミナー2 (Co-design WG 企画) 12 月

20 日 (日) 10:30-12:00

**既存の制度やサービスで働くピアサポーターが
ピアであり続けること**

講師: 横山紗亜耶 (東京大学)

座長: 岩崎香 (早稲田大学)

研修セミナー3 (京都大会企画) 12 月 20 日

(日) 13:20-14:50

**ヤングケアラーからの発信: 同じ立場の若者に伝
えたいこと、支援者に伝えたいこと**

座長: 蔭山正子 (大阪大学)

座長: 松岡美智子 (久留米大学)

演者: 平井登威 (CoCoTELI)

演者: 坂本拓 (精神疾患の親をもつ子どもの会 こどもぴあ)

演者: 竹田明子 (京都市ユースサービス協会)

公開講座 12 月 20 日 (日) 13:20-14:50

**社会の中の依存症: 多様性の時代の精神科リハビ
リテーションの視点から**

演者: 松本俊彦 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所)

経験者からのメッセージ: 榎原節子 (京都マック)

座長: 市来真彦 (東京医科大学)

ランチョンセミナー1 (京都大会企画) 12 月

19 日 (土) 12:25-13:25

**京大式障害者雇用: 障害開示を前提とした“合意
的配慮”の考え方**

演者: 濱野康子 (京都大学)

演者: 平山聡 (京都大学)

座長: 三井督子 (京都大学)

共催ランチョンセミナー1 (大塚製薬株式会社

共催) 12 月 19 日 (土) 12:25~13:25

FACEDUO (VR トレーニング) に関するテーマ

演者・座長: 調整中



京都大会企画委員スタッフ



共催ランチョンセミナー2(株式会社ナガセ 共催) 12月20日(日) 12:10~13:10

AI時代の学修支援の処方箋

演者・座長：調整中

共催ランチョンセミナー3(一般財団法人電気安全環境研究所電磁界情報センター 共催) 12月20日(日) 12:10~13:10

電磁過敏症に関するテーマ

演者・座長：調整中

オープニングコーラス(京都大会コーラス隊 feat. 京都大学医学部混声合唱団 Medical Choir with だめだこりゃ Kyoto OT Band) 12月19日(土) 10:00~10:15

京都大会コーラス隊のメンバーを絶賛募集中です。詳細は京都大会 HP をご覧ください。

優秀演題賞選考セッション(口述部門) 12月19日(土) 14:55~(終了時刻調整中)

一般演題(口述)への登録演題のうち、58名の筆頭演者の皆様から優秀演題選考セッションへのご応募をいただきました。優秀演題賞選考委員会による厳正な審査を経て選ばれた演題の演者の皆様に、優秀演題賞選考セッションでご発表いただきます。

ポスター発表 12月19日(土)・12月20日(日)

会場では、ふせんを活用して演者の皆様と参加者の皆様との交流を促進します。優秀演題賞(ポスター部門)は、参加者の皆様の投票によって決定いたします

多彩な自主プログラム 12月19日(土)・12月20日(日)

バラエティに富んだ36の自主プログラムが行われます。

中高生サミット 12月20日(日) 10:30~12:00

これからの時代をともに生きる中高生の皆さんと一緒に、「心の生きづらさ」を包み込む共生社会について考えるサミットを開催します。

ゲーミフィケーション体験コーナー 12月19日(土)・12月20日(日)

就労継続支援 A 型事業所 ALBUM の協賛により運営いたします。

スタンプラリー 12月19日(土)・12月20日(日)

すべて集められた方には、記念品を進呈いたします。

優秀演題賞授賞式 12月20日(日) 15:00~15:30

閉会式で、優秀演題賞(口述部門・ポスター部門)の授賞式を行います。優秀演題賞選考セッション演者、ポスター発表演者をはじめ、皆様ぜひご参加ください。



京都大会 HP より

≫ 京都大会 研修セミナー案内

研修セミナー1 (研修委員会)

PPI (当事者・市民参画) 時代の研究倫理入門 — 精神障害リハビリテーション領域の研究実践のために

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所

地域精神保健・法制度研究部

松長 麻美

精神障害リハビリテーションの分野では、研究者だけでなく、実践家、当事者の方、当事者家族の方など、さまざまな立場の方が学会や学術誌で発表する機会が増えています。その一方で、倫理的な配慮のあり方に悩んだり、倫理審査の手続きに戸惑ったりすることも少なくないのではないのでしょうか。所属先に倫理審査委員会がなかったり、研究倫理について体系的に学ぶ機会がなかったという方もいらっしゃるかもしれません。

本研修セミナーでは、研究倫理をご専門とされる京都大学の森拓也先生にご登壇いただき、多様な背景を持つ方々がそれぞれの立場で研究を行う際に必要となる倫理的配慮の考え方を実践的に学びます。医学系ではない研究や実践報告では、倫理審査の仕組みが十分に整っていないという現状もありますが、本研修ではこうした現状を踏まえながら、研究のトレーニングを受けているかどうかや研究方法の違いにかかわらず、研究における倫理的配慮のあり方を考えます。

また、当事者・市民の研究参画 (PPI) の広がりに見られるように、当事者の方が研究や発表に主体的にかかわる機会が増えています。当事者の方がご自身の経験を公表する際、その語りの中に

登場する関係者 (家族、支援者など) の個人情報や尊厳をどう守るかという問題も、ますます重要になっています。本研修では、こうした論点についても取り上げます。研修セミナーは講義 (60～70 分) と個別質疑 (20 分程度) の二部構成です。前半は研究者、実践家、当事者、ご家族、ピアサポーターなど、幅広い立場の方のご参加をお待ちしています。

研修セミナー2 (Co-Design プロジェクト企画)

「既存の制度やサービスで働くピアサポーターがピアであり続けること」

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学部

岩崎 香

Co-Design プロジェクトは、2024 年度、日本精神障害者リハビリテーション学会への障害当事者の参画をどう考えるのかを問題意識として学会活動の一環として設立されました。

今回の研修セミナーは、『絶望と熱狂のピアサポート——精神障害当事者たちの民族誌』 (世界思想社、2025 年) の著者である横山紗亜耶氏を講師に迎え、参加者との意見交換を行う予定です。

横山氏からは以下のメッセージを頂いています。

障害者ピアサポート研修が国の事業として実施されるようになった 2020 年以降、ピアサポーターという存在はますます広く知られるようになりました。ピアサポーターの雇用がある程度普及し、ピアサポーターを志す人が増えるなか、当



事者が既存の制度やサービスで働くことの意味が改めて問われていると考えます。

単に精神疾患や障害の経験があれば「ピア」なのでしょうか。既存の制度に則りサービスを提供しているだけでは「ピア」ではなくなるのか。このような「ピア」という立場やアイデンティティの揺らぎに対し、専門職の側はどのような責任を引き受けてしかるべきなのか。当日は、このような問いをさまざまな立場にある人が本音で話し合う場をともに作りたいと思います。そして、制度化が進んだ現状に批判的でありながら、「ピアは制度に取り込まれた」といった単純化にも抗するためのヒントを得たいと思います。

話し合いのテーマは、『絶望と熱狂のピアサポーター』のなかでも特に反響のあった箇所に基づき、次の2つに設定しています。既存の制度やサービスが健常者中心主義的な働き方を要求するなか、①志あるピアサポーターであり続けるとはどういうことか、そして、②専門職には何をすることができなのか、です。以上のテーマを起点として、会場全体で意見交換を行う予定です。

研修セミナー3（京都大会）

ヤングケアラーからの発信—同じ立場の若者に伝えたいこと、支援者に伝えたいこと—

久留米大学神経精神医学講座

松岡美智子

「ヤングケアラー」という言葉が広く知られるようになり、各地で支援体制の整備が進んでいます。一方で、この言葉が親の責任を問うものとして受け取られたり、親と子どもを対立する関係と

して捉えさせたりすることもあります。しかし、子どもがケアを担う背景には、病気や障害、生活上の困難を抱える親を含め、家族全体が支援を必要としている状況があります。とりわけ親が精神疾患を有する場合、成人の精神科医療・福祉と児童福祉・教育等の支援が分断されやすく、親側の支援者が子どもの存在や思いに気づく機会は十分とはいえません。

本セミナーでは、ヤングケアラーの概念と支援の変遷、「ヤングケアラー」という言葉の浸透に伴って生じた親の思いを整理するとともに、精神疾患のある親と暮らす子ども（Children of Parents with a Mental Illness : COPMI）への心理教育を紹介します。さらに、3人のシンポジストがそれぞれの実践を報告します。平井さんはCoCoTELIの活動をもとに、支援領域の分断などの構造的課題と、困難が深刻化する前から親子を支える必要性を語ります。坂本さんは、子どもとしての体験と精神保健福祉士としての経験から、病気が家族に及ぼす影響を理解し、家族をともに支える視点を伝えます。竹田さんは、子ども・若者ケアラーのレスパイトを目的としたユースショートステイの実践を通して、「休むこと」の意味と可能性を提示します。

子どもの声を丁寧に聴き、親を責めることなく負担を軽減するには、どのような支援が必要でしょうか。成人精神科領域にできることも含め、当事者・家族・支援者が手を取り合う支援のあり方を、参加者の皆さまと一緒に考える時間にしたいと思います。

>> 第 33 回京都大会プログラム委員長 (稲富宏之先生) に聞く大会の見どころ 「五感と心で体感する、学びのメモリを京都で。」



大会についてのインタビューの様子
 (左上、大原広報委員、右上、中村広報委員、下
 稲富プログラム委員長)

第 33 回京都大会の開催に向けて、大会の見どころや企画に込められた想いをプログラム委員長にお話を伺いました。学術プログラムはもちろん、参加者同士の交流や、さまざまな立場の人が参加しやすくなるための工夫など、京都大会ならではの特色が見えてきました。

日本精神障害者リハビリテーション学会第 33 回京都大会のテーマは、「語りあい、つながりあい、共に生きるーリカバリーの新しい風を京都からー」です。専門職や研究者に加え、当事者、家族、市民、若い世代が経験や知識を持ち寄り、これからの精神障害リハビリテーションを考える大会を目指しています。

学術プログラムでは、大会長企画としてメンタルヘルスの社会的要因を多様性・公平性・包括性の視点から考える海外招聘講演とパネルディス

カッションが予定されています。教育講演は、副大会長の村井俊哉氏による精神科臨床における専門性と民主性の両立をテーマとした講演の他、Joshua Breslau 氏、顧問の山下俊幸氏の講演があります。大会シンポジウム・学会シンポジウムでは、地域生活・社会参加への支援、災害時の支援、未来のリハビリテーションとリカバリーなどのテーマが予定されています。京都大会の特色は講演を聴くだけの学会ではなく、「五感と心で体感する学会」でもあります。オープニングでは、参加者も加わるコーラスを企画し、京都大学医学部混声合唱団 Medical Choir と作業療法士有志による「だめだこりゃ Kyoto OT Band」が共演します。

「普段とは少し違う頭の使い方に、体を使うことも加わると、学びのメモリ（記憶）になる」。会場で声を合わせ、誰かと語り合うことも含め、千葉理恵大会長をはじめスタッフ一同、記憶に残る大会を目指しています。中高生サミット、ポスター会場での付箋コミュニケーション、託児室の運営、手話・手引き対応、多言語対応など、さまざまな人が参加しやすい工夫も進めています。

プログラム委員長からは、「京都を楽しみつつ、学会場で年に一度の交流を深めてほしい」とのメッセージがありました。新しい研究や実践につながる出会いを求め、「五感と心で体感する、学びのメモリを京都で」。

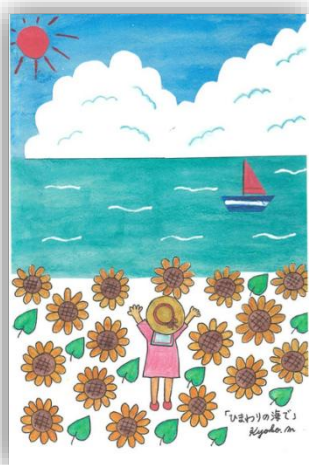
皆さまのお越しを心よりお待ちしております。
 (聞き手：大原・中村広報委員 話し手：稲富プログラム委員長)

第 34 回かごしま大会開催予定
 会期：2028 年 1 月 29 日(土)・30 日(日)
 会場：宝山ホール（鹿児島県文化センター）
 大会長：児玉 圭(医療法人蒼風会こだま病院 理事長・院長)

02 / ニュースレター表紙の作者のご紹介

ニュースレター初の試みとして、当事者の方に本ニュースレターの表紙のための絵を作成していただきました。当事者、専門職者関係なく、生きにくさと時に戦い、時に共存し、時に乗り越える中で、それぞれの心の“伴走者”と呼べるものが誰にもあるのだと思います。それがご家族であったり、友人であったり、ペットであったり、音楽であったり、ことばであったり。それらは本人を暖かくしてくれるだけでなく、他の人にも素敵な“何か”をもたらしてくれます。広報委員が、最近であったそんな“絵”と作者の言葉をご紹介します。また、デイケアで絵画のプログラムに携わったご経験のある公認心理師藤田英美さん（横浜市立大学附属病院）から、絵とデイケアでの取り組みについて、紹介していただきました。

（広報委員 吉見明香）



この絵は一命をとりため、ICUにいた時に表紙の絵の依頼を受けて思いついた絵です。健康は心と身体にあって、思いきり夏を満喫したいという願いを込めて描きました。「ひまわりの海で」自由に泳ぎたいって思いました。そうしたら、きっと私の長年患っている精神の病も良くなるにちがいないという明るい希望が、この絵を見て下さる方にも伝わると思います。

絵を描くことなどの創作活動には、言葉にできない感情を表現する働きがあります。色鉛筆やクレヨン、絵の具の懐かしい匂いに触れたり、手を動かす一定のリズムに没頭したりすることは心を落ち着かせ、悩みやストレスから一時的に離れることもできます。また、作品を完成させる達成感や自己肯定感を高め、人と繋がる機会にもなります。精神科医療の中では、デイケアの創作活動の時間が代表的でしょう。以前デイケアにスタッフとして参加していた際には、個別に創作活動に取り組む時間もあれば、県内のデイケア合同作品展のために、皆で一つの作品に取り組むこともありました。今年は何に取り組もうかと皆で話し合

い、材料を準備し、皆で協力して完成させます。穴あけパンチで作った丸いパーツの貼り絵、タイルモザイク、油絵、地元のシンボルである建築物の工作など様々な作品に取り組みました。現在も院内に一部が飾られており、その前に立つと当時のメンバーさんの笑顔や和気あいあいとした温かい空気を思い出します。子どもの頃には身近だった創作活動の時間ですが、大人になり、デイケアからも離れて機会がなくなりました。創作活動は素の自分と向き合う時間にもなります。創作活動に触れる時間を、今こそ大切にしたいと感じます。

（横浜市立大学附属病院 藤田英美）



03 / 論文執筆におけるパラグラフ・ライティングと資料公開

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部 山口創生

精リハ誌編集委員会では、先日、「投稿論文におけるパラグラフ・ライティング」に関する資料を投稿規定のウェブサイトで公開しました (<https://japr.jp/publication/posting-rules/documents/>)。本稿では、この資料を作成・共有した狙いについて紹介します。

「論文を書くことは難しい」と感じる方は少なくないと思います。一方で、論文執筆には一定のルールがあり、そのルールを理解することで、書くことへの負担感は少し軽くなるかもしれません。一般に論文執筆と聞くと、「背景(はじめに)」「方法」「結果」「考察」「結論(おわりに)」という順序で構成することを思い浮かべる方が多いと思います。この順序は重要な基本ルールですが、実は各セクション、特に背景や考察の中で、どのように文章を組み立てるかについてもルールが

あります。その代表的な方法が、パラグラフ・ライティングです。パラグラフとは、ひとつの内容を伝える文章のまとまりを指します。各パラグラフは、基本的に①トピック文、②サポート文、③結論文の順に構成されます。つまり、論文はパラグラフを積み重ねて作られる文章ともいえます。パラグラフ・ライティングを理解すると、論文の文章構成は決して難解なものではなく、一定のルールに基づいて文章を整理できるようになります。

パラグラフ・ライティングの記述例

精神障害当事者（以下、当事者）のスティグマは国際的な問題である。世界保健機関の調査によると、世界中の当事者の約 90%が市民からの偏見を日常的に認識しており、約 70%が不当な解雇などの差別を受けていると報告している（WHO, 2010）。日本でも、多くの当事者が就労や交友関係で差別的な扱いを受けた経験があると報告されている（山口ら, 2011）。よって、国内外で当事者に対するスティグマの是正が求められている。

← ←

精神障害に関するスティグマとは、…←

←

←

下線：トピック文→段落の趣旨を伝える←

※ 通常、引用文献は用いない←

網掛け：サポート文→詳細や理由を書く←

※ 通常、引用文献を用いる←

二重線：結論文→段落のまとめや結論を書く←

※ 通常、引用文献は用いない←

※ 次の段落へのつなぎとなるような文言



論文には、パラグラフ・ライティングに代表される執筆の基本的なルールがあります。言い換えると、現在の論文は、独創的なアート作品というよりも、明確な組み立て説明書に沿って作るプラモデルに近い書き物だといえるかもしれません。人によっては、自身の活動や実践をもっと自由に表現したい、自分の思いをよりストレートに伝えたいと感じることもあると思います。そのため、論文は少し堅苦しいと感じられる場合もあるかもしれません。

そのような心情も理解できますが、リハビリテーションを含む科学は、「巨人の肩の上に乗る」という姿勢で発展してきました。この言葉は、先人が積み上げてきた知識や発見を土台にする事で、さらに遠くを見渡し、新しい発見につなげることができる、という意味を持っています。この姿勢は、論文の内容だけでなく、論文の書き方にも当てはまると考えています。パラグラフ・ライティングもまた、先人が積み上げてきた、知見を正確に伝えるための基本的な方法のひとつです。

編集委員会が「投稿論文におけるパラグラフ・ライティング」の資料を共有した背景には、投稿された原稿をできる限り掲載につなげたいという思いがあります。しかし、これまで投稿された原稿の中には、内容そのものは重要であるにもかかわらず、文章構成の問題によって意図が十分に伝わらず、査読に進まなかったり、査読者が内容を十分に精査できず不受理となったりするものがありました。個人的には、調査や実践の内容が素晴らしいにもかかわらず、文章構成の問題で原稿が掲載に至らないことは、とても「もったいない」と感じています。各著者がパラグラフ・ライティングという基本的なルールに沿って原稿を執筆することで、このような「もったいない」状況は減らせる可能性があります。今後、精リハ誌への投稿を検討されている方には、原稿を執筆する前に、「投稿論文におけるパラグラフ・ライティング」の資料にぜひ目を通していただくと嬉しく思います。

04 / 令和9年度理事改選にむけて

今年度は理事改選の年にあたり、「理事の選出に関する会則」に基づき次期（2027年度～2029年度）理事の選挙を行い、20名の理事を選出します。

近日中に選挙管理委員会を立ち上げて選挙の手続きを進めて参りますので、学会運営にご関心のある方は立候補を検討いただければ幸いです。

なお、理事の選挙の選挙権及び被選挙権は、選

挙投票日の3ヶ月前時点の正会員に限られます。理事選挙への立候補・推薦の受付については、追ってご連絡いたします。

皆様の積極的なご参加をいただき、より良い学会運営につなげていければと存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。

（学会事務局：池田 望）

>> 編集後記

表紙の絵の作成を作者の方をお願いしたのは、まだまだ、真夏の暑さが恋しい頃でした。会員の皆様は夏を満喫されたでしょうか。ひまわりには出会いましたか？季節のめぐりごとは美しく、自然とのふれあいや気づきは、リカバリーに通じるものがあると思います。とはいえ、今の猛暑の中では、涼しい（寒い？）冬の学会が恋しいです。今年の京都大会は特集でもふれたように、楽しい企画が満載です。大会のテーマ「語り合い、つながりあい、ともに生きる」のビジョンを共有するために、ぜひ皆様お誘いあわせの上、ご参加ください。きっと、素晴らしい出会いがあることでしょう。右は私がこの夏の終わりに堪能したパフェです。生きていることを実感いたしました。（広報委員：吉見明香）



学会インタビューを稲富プログラム委員長に対して中村広報委員主導で一緒に行いました。魅力的なプログラムをたくさん紹介していただきました。精神科医、看護師、作業療法士などの専門職参加だけでなく、当事者や一般市民、学生参加などさまざまな方たちと交流ができそうで、12月が楽しみです。追記：十和田湖に友人と旅行に行った2日後に、外国人が十和田湖周辺で熊に襲われたというニュースが報道されて、ビックリです。（広報委員：大原さやか）

この夏は、豪雨や地震のニュースが相次ぎました。7月末の熊本県での地震に続き、8月23日には茨城県南部でも最大震度5弱の地震があり、当たり前の日常のありがたさをあらためて感じました。学会で人と会い、語り合えることも、その一つなのかもしれません。冬の京都で皆さまとお会いできることを楽しみにしています。（広報委員：中村泰久）

News Letter

VOL.68

2025年9月発行

日本精神障害者リハビリテーション学会

【事務局】

〒060-8556 北海道札幌市中央区南1条西17丁目

札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学第二講座 池田研究室

Mail: japr.jimukyoku@gmail.com

